

論文概要

8世紀前半頃から16世紀前半頃までにわたって、ジャワ島の中・東部において、インドの文化的な影響を摂取してヒンドゥー教及び仏教の諸王朝が栄えた時代は、古代ないしヒンドゥー・ジャワ期と呼ばれ、またそれらの王朝が造りだした宗教芸術は、ヒンドゥー・ジャワ芸術と呼び習わされてきた。ヒンドゥー・ジャワ期は、肥沃なオパック川、プロゴ川の流域、即ちジャワ島の中部に文化的・政治的な中心のあった中部ジャワ期（8世紀前半頃～10世紀前半頃）と、王宮及び都が東部ジャワに移された後、広大なプランタス川流域を中心に文化の栄えた東部ジャワ期（10世紀前半頃～16世紀前半頃）とに二分される。

ヒンドゥー・ジャワ芸術の遺構の内、石造ないし煉瓦造の宗教建造物は「チャンディ」と総称されるが、本論文で焦点を当てるのは、ヒンドゥー教（シヴァ派）の寺院建築遺構であるチャンディの伽藍構成である。それらの遺構は、正方形ないし矩形の囲繞壁によって取り囲まれた敷地内に、数基の祠堂を配してその伽藍が構成されている。そして一見して左右対称の構成が遵守されているように見えて、囲繞壁内に配置された祠堂群が僅かながら南北方向へずれている事例が認められる。こうした伽藍を、本論文では「非対称の伽藍構成」と呼ぶ。

本研究は、古代ジャワのヒンドゥー教チャンディの伽藍に認められる非対称的構成に着目した上で、その成立の経緯、さらには非対称伽藍に投影された象徴的意味・空間的特質について、ヒンドゥー教の祖地インドに残された文献の記述との対照、またジャワの仏教寺院の伽藍構成との比較、ひいてはバリ島の神観念をも視野に入れつつ明らかにするものである。

本論文は、序論3章、本論5章、結論の構成をとる。

序論第1章では、まず上記のような本研究の目的を述べた。続く第2章では、非対称伽藍に関する既往研究の成果をまとめ、併せてその問題点を抽出した上で、続く本論各章との対応を示した。また第3章では本論文の構成を述べた。

祠堂群の「ずれ」が、施工時における単なる誤差の類ではなく、意図的な「ずらし」と言えるのかという問題について、図面などの具体的なデータに基づいた論証は未だ充分に行われておらず、また遺構例を網羅した上で、その伽藍配置を種々の見地から分析し、統合して考察する悉皆的な研究も不充分であった。

そこで本論第1章では、主に筆者が作成した伽藍配置図を基に、非対称伽藍の特質について明らかにした。まず伽藍の中央には、原則としてシヴァを祀る主祠堂が西ないし東面して配置され、またそれに正対して三基の副祠堂が配置される。祠堂群は伽藍の中央に置かれずに若干北側へずれる傾向が看取された。また寺院敷地の中心点と、主祠堂の正蔓階段翼壁（ないし正面突出部の側壁）と基壇の交差する隅の部分とが、概ね一致する傾向の認められることも確認された。さらにその敷地中心点にリング状立石、チャンディのミニチュア（小塔）などの置かれる事例が認められたことにより、寺院敷地の中心点が特別視されている可能性が高いと判断された。以上の諸点に鑑みれば、神聖視された寺院敷地の中心点を避けるべく、祠堂群全体がずらされていると見る既往の論説は是認され得る。また寺院の敷地中心点だけではなく、四方四維に位置する地点にもリング状の立石などの置か

れる事例が認められる点が特筆される。この種のヒンドゥー教寺院は、中部ジャワ南部から東部ジャワにかけて広範囲に分布し、さらにその推定建立年次は、8世紀の前半から13世紀の末までの長きにわたる。考察の対象として挙げた遺構は10例に留まるが、それらがジャワに現存する主要なヒンドゥー教寺院の殆どを占めることにより、上述の伽藍はジャワのヒンドゥー教寺院に於ける伽藍型式の一典型として、中部ジャワ期から東部ジャワ期に至るまで一定の拘束力を持ち続けていたと考えられることを論述した。

非対称伽藍が、いつ頃、どのような過程を経て成立したと見られるのかという問題に関し、フランス極東学院のジャック・デュマルセ氏が自説を提示しているが、特定の中部ジャワ政治史に立脚したその解釈には基本的な問題がある。従って本論第2章では、中部ジャワ北部山間地のシヴァ教の遺構群との建築様式上の比較検討を行い、非対称伽藍を有するヒンドゥー教寺院の成立の経緯を探った。非対称伽藍は、中部ジャワ南部にのみその存在が確認される点が特筆される。そして古式を残すとされる中部ジャワ北部山間地の遺構群に見るモールドィング、基壇の型式が、発達南下して中部ジャワ南部に新たな展開を見せた結果、それに相対応する形で遅くとも732年頃までに、非対称の伽藍構成が中部ジャワ南部の地に新たに成立するに至ったと考えられる点を明らかにした。

本論第3章では、インドの諸文献の読解を通じて、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラと非対称伽藍との関連を考究した。インドに現存する建築書の殆どに詳細に記述されている地鎮祭儀礼の中では、世俗の建築、また宗教建築を問わず、それらを造営する際に、その建設用地の上にグリッドに区切られた正方形の図形を描き、またそこでヴァーストゥ・プルシャと呼ばれる土地を支配する一種の精霊と、ブラフマー神を始めとする様々な神々が勧請されて供養を行うことが記されている。この時に描かれる8×8、9×9などのグリッドとして表された図形はヴァーストゥ・プルシャ・マンダラと呼ばれる。そしてマンダラの特定の地点、なかんずく中心点を含む中央区画の内外の地点を、ヴァーストゥ・プルシャの身体上の脆弱な急所に見立て、その地点上に神像や建物を置くことをタブー視するという文言が記載されている。このような「マルマン」（急所）の規定に類する観念に基づき、ジャワのヒンドゥー教寺院に於いては、敷地中心点が特別視され、なおかつ避けられていると見る既往の解釈を追認するに至った。これに加え、南インドの代表的な文献である『マヤマタ』に記述されたマンダラを基本とするグリッドに勧請された諸神の配置と、チャンディ・ロロ・ジョングラン内苑に配せられた諸神の配置とに、一定の共通した規則性を認められる点などは、ヴァーストゥ・プルシャ・マンダラに類する神観念が、ジャワ島に流布したと推測させるに有力な要因になることを論述した。また関連文献の読解により、避けられるべき空間上の「中心」は、古代インド思想における始源的な原理であり、大宇宙の中心とされる「梵」（ブラフマン）の観念に関連付けられているものと理解され、従ってジャワのヒンドゥー教寺院に於いても、聖別された敷地中心点に「梵」の概念が表象されているとも見なし得ることを指摘した。

他方、インドの神観念の影響とは別の文脈、即ちジャワからバリ・ヒンドゥーへの継承的な発展という文脈の中で、避けられた「中心」の意味を考察し得る。ジャワのヒンドゥー諸寺院の敷地の中心点、そして八方位に位置する地点に置かれたリング状の立石を、先に記した「梵」の観念とは別に、そのまま素直にシヴァないしその別神格と見れば、シヴ

アの別神格八神によってヒンドゥー教の三大神が取り囲まれる図像として構想された大宇宙の縮図が基本的観念として存在し、その図像的空間を寺院の伽藍配置に取り込むという宗教的理念の下に、チャンディ・ロロ・ジョングランが造営されたものと考えられる。そしてこのような図像は、バリ島のナワ・サンガの観念に共通する点も明らかにした。つまりジャワに於いては、インドの「梵」の観念に関連して急所として避けられた寺院敷地の「中心」に、重合的にシヴァ神を立てて象徴的な宇宙の中心を表象し、なおかつそれをリングとして明快に顕示している可能性について考察した。

本論第4章では、上記のナワ・サンガの観念について、既往の研究ではインドやネパールなどにその起源が求められていたのに対し、筆者はむしろバリと蜜実な関係を有していたことの明らかな古代ジャワのヒンドゥー教及び仏教の図像学的な分析を通じ、ナワ・サンガの観念が、古代ジャワに於ける方位神の体系の発展系列の延長上に位置付けられるという説の提示を試みた。まず、中央に座すシヴァの北・南側にヴィシュヌ及びブラフマーを配する「三神の体系」に、東西を司るシヴァの別神格である二神が加わり「五神の体系」へと展開し、さらに四維に同じく四柱のシヴァの別神格が加わり「九神の体系」を成し、より一層組織的な方位神の体系がジャワで成立するに至り、それがナワ・サンガの観念へ継承されていると考えられる点を明らかにした。ナワ・サンガとチャンディ・ロロ・ジョングランの伽藍に見るヒンドゥー教図像には類縁性が認められるだけでなく、中部ジャワ期から連綿と継承される神格配置の発展系列の中に各々を位置付けることが出来る。

本論第5章では、中部ジャワの重要な仏教遺構四例について、伽藍の対称性という観点から分析を行ったが、これらの事例では左右の、あるいは四方の対称性が強く意識されていることは明かで、むしろ仏教遺構の対称的な伽藍は、ジャワに於ける仏教の思想と、それに伴う尊格の構成原理と密接に関連するものであり、伽藍を左右ないし四方対称とすることには必然性を認め得ることを述べた。つまり裏を返せば、左右対称を基本としつつも、寺院敷地の中心点を避けるべく祠堂群をずらして造られる非対称の伽藍は、ジャワにおいてはヒンドゥー教の諸遺構に固有の配置型式であると推察される点を指摘した。

結論では本論各章で得られた新たな知見を要約した。